



スーパー グローバル ハイスクール

佐高 SGH通信 2017

No.23(2017年8月31日)

夏休み中のSGHクラブの活動レポート

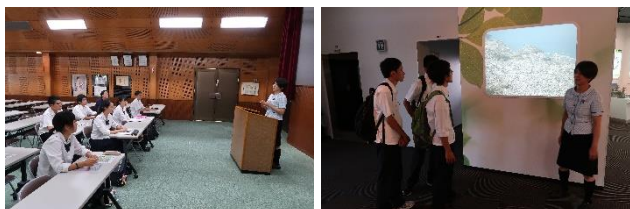
SGH水俣フィールドワーク

夏休み中、8月1日(火)から4日(金)にかけて、SGHクラブ研究班・水俣チーム(6名)が水俣でフィールドワークに取り組みました。テーマは「公害からの復興とエコに関する取り組み」についてです。フィールドワークの概要を報告します。

1日目

～「JNC株式会社 水俣製造所」訪問～

本工場は、かつて「チッソ水俣工場」と呼ばれていました。しかし現在では、液晶を始めとする様々な優れた技術で、社会に貢献をする先端化学企業に生まれ変わりました。特に液晶については、世界シェアの40%を占め、国内の家電メーカーはほとんどこの液晶を使用しているそうです。一方、過去には水俣病の原因となった汚染物質の流出を起こしてしまったこともありました。今でも多くの方が苦しんでいる中、反省をもとに補償を行っているそうです。現在では、まだ完全な解決には至っていないものの、地域のために尽くすことで、地域の方々と協力して事業を展開できるようにはなってきたという事です。



最初に「毒性病態研究室」でメチル水銀の毒性について、細胞レベルの研究を行っている先生の話が聞くことができました。まだまだ分からないことがあるものの、脳のどの部分で害が起きて、どの部分では害が起きないかなどの詳しい話を丁寧にいただきました。また、実際に細胞の一部を切り取る作業を体験させていただきました。

次に「リハビリテーション室」で話を聞かせていただきました。まず、作業療法士についての説明から入り、具体的に水俣病患者へのリハビリの内容について、詳しく説明していただきました。また、実際にやっているリハビリの一環の革細工作製も体験させていただきました。



2日目

～「水俣市立水俣病資料館」「国立水俣病情報センター」訪問～

水俣病の発生、原因究明、裁判、地域住民同士の関わり、現在に至るまで等、より詳しく水俣病についての知識を深めることができました。元々、水俣は非常に豊かな漁業地でした。そこへ「チッソ水俣工場(現「JNC株式会社 水俣製造所」)」が生まれ、まちも豊かになっていき、多くの人で賑わう工業都市になりました。しかし水俣病の発生により、多くの方が犠牲になってしまいました。やがて裁判・補償問題になっていくこととなります。一方、「チッソ水俣工場」は住民の生活を維持するうえで、なくてはならない存在でした。それゆえに市民同士でも争いが起こったそうです。水俣病と認定を求める被害を受けた方々の闘いは今もなお続いています。市民が望む水俣の再生は、環境の復元はもちろんですが、市民同士の心の融和です。



3日目

～「水俣協立病院」訪問～

ここでは、水俣病不知火患者会の事務局長、副会長、及び原告の方の話を実際に聞くことができました。

昨日までの研修で、水俣病の知識は深まったものの、実際に生の声を聴かせていただくとさらに現実には厳しいものであることを痛感させられました。例えば、急性劇症型ではない患者さんの場合、はたから見ると水俣病の患者ではないように思われますが、実際には様々な感覚障害が起きている方がかなりの数いらっしゃるそうです。また、それ以外にも仕事への障害も起こり職を転々とせざるを得ないような状況が発生するなど、目に見えない被害がたくさんあるという説明を受けました。印象に残ったのは、実際に裁判に原告として話していただいた方が、涙ながらに声を絞りだすようにして「本当は、チッソ(チッソ水俣工場)を訴えたくはないのが本音。」とおっしゃっていたことです。では、なぜ裁判の原告として頑張るかということ、「早く解決して水俣を明るくしたいから。お金の問題ではない。」ということでした。全面解決というのは、やはり水俣病の患者の全員救済と、地域の方との不和の解消

を訴えておられました。いまだに偏見や差別があるのが現状のようです。



～「アクトビリーサイクリング株式会社」訪問～

今回のもう1つの研修テーマである「エコ」についての水俣市の取り組みを、実際に企業を訪問することによって知ることができました。

ここでは、2001年に承認を受けたエコタウン水俣市で、具体的にどのようにリサイクル事業を行っているかのお話と、工場の見学をさせていただきました。普段私たちが使っている寿命を終えた家電がそこにはありました。家電を使って壊れたら廃棄するだけの私たちでは、どのように分解されて再利用されているかを考える機会はなかなかありません。そこでは多くの従業員がそれぞれの役割を確実にこなしてリサイクルに取り組む様子を見ることができました。またここでは、障害のある方の活躍も拝見することができました。

私たちの周りは便利な家電であふれていますが、その傍らで壊れた家電のリサイクルについても多くの方が関わっていることを忘れてはならないと感じました。



～「わくワークみなまた」訪問～

ここでは、主に障害のある方を従業員として受け入れて、「エコ・リサイクル」に取り組んでいる様子を拝見することができました。ペットボトルのリサイクルを主として行い、卵パックや洗剤容器等に再利用しているそうです。所長自ら、障害者福祉と障害者雇用に関する説明を詳しく話していただきました。現在、水俣病の患者さんも3名ここで勤務されているということです。



4日目

～「さかえの杜 ほっとはうす」訪問～

ここでは、生まれながらにして水俣病を患っている胎児性水俣病の方々の話を聞くことができました。まだ若い頃は歩けた方も、突如歩行が困難になってしまった無念さは計り知れません。患者さんたちの「私たちの体を返してほしい。」という気持ちは共通のものでした。そして「仕事をしたい。」という希望も共通のものでした。大変な運命を背負ってしまったにもかかわらず、研究員の質問にも丁寧に答えていただきました。



～「水俣市役所」訪問～

このフィールドワークの総括ということで、市役所を訪れて話をうかがい、質疑応答の時間をいただきました。水俣病に関する内容はもちろんのこと、エコタウン水俣としての活動に関する話もあり、質疑応答にも丁寧に答えていただきました。現在、水俣市はゴミの分別を20種類にも分けて行い、そのリサイクル還元金として得ることのできたお金を地域に還元しているそうです。ここからも公害問題から立ち向かおうとする姿勢を感じ取ることができました。大変短い滞在時間となってしまいましたが、今回のフィールドワークの総括として非常に貴重なお話を伺うことができました。

～研究員の感想（抜粋）～

○この4日間で学んだことをさらに深め、正しく広め、ある1つの出来事ではなく大切な教訓として残し続けることが私たちができることなのではないかと思います。

(2年 倉持 未夢)

○とても内容が濃く記憶に残る4日間になりました。この経験を無駄にすることのないように、ちゃんとまとめて、たくさんの人に知ってもらえるよう積極的に発表していければと思います。

(2年 古谷 菜奈)

○一つのことに対して、それぞれの立場や人生で、意見に違いがあった。しかし、間違っただけではないだろう。すべての意見に耳を傾けた上で、自分は何ができるか？何をすべきか？考えていきたい。

(1年 新井 康平)

○この研修で経験したことは非常に心に残った。これからつくるまとめで、多くの人に今の水俣、本当の水俣を伝えたい。

(1年 安生 温大)

○4日間で聞いてきた数々の言葉を、正しい知識を、周りの人や後世に伝えるためにも、発表の準備をしたいと思います。

(1年 須藤 悠希)

○それぞれ立場によって考え方が違うけれど共通しているのは市民同士で協力し合って前に進もうとしている事です。たくさんの方から話を伺う事ができてとても貴重な体験ができました。

(1年 有澤 音羽)

お知らせ

今回の水俣フィールドワークの研究成果を、旭城祭(9/2(土))で発表します。

旭城祭当日は、SGHクラブの研究展示コーナー(教室棟3F)にもお立ち寄りください!

また、本フィールドワークの詳細は、栃木県立佐野高等学校のHPに掲載しています。是非ご覧ください。